

静岡大学教育学部と学校・地域との連携：  
教育学部「授業研究会」の取り組み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹沢, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006852">https://doi.org/10.14945/00006852</a>

## 静岡大学教育学部と学校・地域との連携

— 教育学部「授業研究会」の取り組み —

丹沢 哲郎\*

### Cooperation with School and Community:

Report of Efforts in “Study Group of Teaching” on Faculty of Education

Tetsuro Tanzawa

#### 要旨

本稿では、附属学校園を含む学校や地域との連携を進めてきた静岡大学教育学部の取り組みを、平成 21 年度に設立された「授業研究会」の活動を通して報告するものである。具体的には、「授業研究会」の設立に至った経緯と、研究会での活動内容、そして各教科・学校種ごとの連携実績についてまとめた。最後の連携実績については、それを担当した「授業研究会」メンバーによる具体的かつ詳細な報告を掲載した。

キーワード： 学校・地域との連携 教育学部「授業研究会」

#### I 連携をめぐる国の動き

近年、附属学校や公・私立の学校、ならびに地域の教育委員会との連携が、国から教員養成系大学・学部に対して強く求められてきている。たとえば、附属学校との連携強化については、歴史的に以下のような経緯を経て議論が展開されてきている。

そもそも、国立大学と附属学校園との関係については、国立学校設置法施行規則第 27 条に、「附属学校は、その附属学校が附属する国立大学又は学部における児童、生徒又は幼児の教育又は保育に関する研究に協力し、及び当該国立大学又は学部の計画に従い学生の教育実習の実施に当たるものとする」とあり、附属学校園が大学・学部の教育研究と教育実習に資することが目的として掲げられている。

この法律を前提としながら、「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について」と題する報告（通称「在り方懇報告」）が 2001 年に出され、周知のようにこれが現在の教員養成系大学学部改革の基本に位置付けられている。その中では、教員養成系大学学部の「今後の基本的な在り方」について、「大学・学部や附属学校の教員個人同士の問題としてではなく、大学・学部側と附属学校側との間で組織として取り組むことが必要である」という基本認識が示されている。具体例も 4 点示され、その中に「大学・学部と附属学校が連携して、附属学校を活用する具体的な研究計画を立て、それを実践」することが提言されている。

これを受け、「教員養成課程の質的な向上に関する協力者会議」が文部科学省に設置され、その第 3 回会合の配付資料が 2009 年 4 月 27 日に公にされてい

る。そこでは、改善方策として「国の拠点校」「地域のモデル校」としての附属学校園の存在意義を明確にした上で、「附属学校運営会議（仮称）の設置」や「地域運営協議会（仮称）の設置」等、附属学校や地域の教育委員会との連携が具体的に求められている。

静岡大学教育学部では、上記運営会議や協議会に対応する組織はすでに設置済みであり、組織的には対応を終えている。課題は、これらの組織を活用しながら、今後いかなる連携方策を策定し実施に移していけるかにある。

#### II 「授業研究会」の概要

##### 1. 発足の経緯

以上の経緯を受け、教育学部としては、2009 年度の学部総務会において、附属学校園や公・私立の学校、教育委員会等との連携のもとに教育研究を推進する組織として「授業研究会」を設置することが決定された。その財政的、組織的な位置づけについては、「教育実践総合センタープロジェクト」の一つとして活動を展開することとなった。本稿は、その約 2 年間の活動を報告するものである。

##### 2. 研究会の活動実績

研究会としてまず取り組んだことは、実効力ある組織の確立であった。具体的には、教育学部内のすべての講座・教室から最低 1 名の委員を選出し、組織としての「授業研究会」を立ち上げた。委員の構成は次ページの表 1 に示すとおりである。

次に行ったことは、年に数回会合を開催し、それぞれの教科領域・学校種ごとにメンバーから発表をもらい、それらにおける教育の現状と課題について学習し、情報を共有するという作業であった。これまで

\* 静岡大学教育学部理科教育講座

に実施した研究会と発表者の一覧は、表2に示すとおりである。そこでは、23年度より実施が始まる新しい学習指導要領の特徴と課題を踏まえながら、これからの教育・授業実践の方向性について、発表内容を踏まえながら議論を行った。この言わば学習活動とも呼べる研究会のあり方は、現在の学校教育の全体像を把握する上で、極めて有意義であったと言える。

活動の柱の3点目は、研究会運営上の取り組みである。研究会の活動を進めるにあたって、予算執行上の問題や連携活動のあり方の問題、後に述べる研究会のその他の活動の調整など、多くの検討課題があった。これらについて、表2に示した会合において調整・検討を行った。特に、各教科・学校種ごとの連携実績の報告は、互いに刺激し合うよい機会を提供できたと評価している。

最後に、研究会に付随するその他の活動が挙げられる。たとえば、国が求める前述の「附属学校運営会議」に相当する教育学部組織である「附属学校園研究連携推進委員会」が企画・立案・実施する「静岡大学教育学部教育研究フォーラム」への全面的な協力や、附属学校園が毎年秋に開催する公開研究協議会（公開授業研究会）における研究協力者（助言者）の選出など、附属学校園と学部との連携にかかわる様々な活動を担ってきた。言わば連携の具体的「実施部隊」としての性格がここに見て取れる。

以上のように、多彩な活動をこれまで展開してきたが、多くの課題はいまだ残されている。これについては、本稿最後に触れることとしたい。

### 3. 各教科・学校種における活動内容

これまで「授業研究会」の活動概要について述べてきたが、最後に、各教科・学校種における具体的な活動実績について、それぞれのメンバーからの報告を掲載する。以下においては、教科・学校種名、執筆者（文責）名とともに、提出された原稿をそのまま転載する。

なお、音楽教育からの報告については本紀要に別掲論文として掲載されているため、ここに掲載していない。また技術教育については、本稿とともに別掲論文

表1. 授業研究会の委員構成

国語	大塚(浩)	技術	江口・紅林
数学	國宗・熊倉・裕元		
理科	丹沢	家政	澤渡
社会	塩川・黒川・池田・西野・磯山・中條・伊藤		
音楽	志民	英語	矢野
美術	芳賀	特支	大塚(玲)
保体	赤田・岡端	幼児	渡邊(保)

も掲載されているので、併せてそちらを参照いただきたい。

#### 1) 数学教育（國宗進・熊倉啓之・裕元新一郎）

##### (1) 静岡大学数学教育合同研究会

附属中学校数学科教員（OBを含む）と連携して、2009年度より研究を開始した。

<2009年度>

- 第1回(12/1) 研究会の発足とその趣旨説明
- 第2回(2/19) 各学校での授業実践レポートの発表

<2010年度>

- 第1回(6/18) 授業研・研究協議①  
(授業者：磐田市立城山中・近藤正雄教諭)
- 第2回(2/中) 授業研・研究協議②  
(授業者：吉田町立吉田中・竹下知行教諭)

##### (2) 焼津市中学校数学・数指研

焼津市中学校数学科教員と連携して、2010年度より研究を開始した。

- 第1回(5/17) 研究計画の立案
- 第2回(7/5) 授業案・単元構想の検討①
- 第3回(8/16) 授業案・単元構想の検討②
- 第4回(10/8) 授業研・研究協議①  
(授業者：焼津市立東益津中・坂元光延教諭)
- 第5回(12/3) 授業研・研究協議②  
(授業者：焼津市立大富中・稲熊紀昭教諭)
- 第6回(1/下) 研究のまとめ

##### (3) アンサンブルの会

算数教育に関心を持つ浜松市内の小学校教員で構成される。2009～2010年度は算数指導に関する「子どものつまずき」に焦点を当て研究を進めた。原則として、毎月1回研究会を行っている。

##### (4) 西部サークル

表2. 授業研究会の実施実績

21年度研究会実績	
第1回	9月24日(木) 発表者：数学(國宗)、社会(磯山)
第2回	12月17日(木) 発表者：家政(澤渡)、音楽(志民)
第3回	3月24日(水) 発表者：技術(江口)、理科(丹沢)
22年度研究会実績	
第1回	9月24日(金) 発表者：美術(芳賀)、特支(大塚玲)
第2回	12月13日(月) 発表者：保体(赤田・岡端)
第3回	3月上旬開催予定 発表者：英語(矢野)

数学教育に関心を持つ浜松市内の中学校教員で構成される。数学教育改善のための授業や教材について研究を進めた。年間で5回程度研究会を行っている。

(5) 数学授業を語る会

数学教育に関心を持つ小笠地区、志太地区の中学校教員で構成される。2010年度より開始して、数学教育改善のための授業や教材について研究を進めた。年間で3回程度研究会を行っている。

2) 理科教育(文責: 萱野貴広)

(熊野善介・丹沢哲郎・内ノ倉真吾・萱野貴広)

(1) 平成20, 21年度文部科学省委託(独) 科学技術振興機構公募事業「社会とつなぐ理数教育プログラムの開発」の採択を受けた、「静岡発、「教科と学びの創造」のための感動・体験理数キャリア教育プロジェクト」(研究代表 熊野善介)において、中学生が理数学習と日常生活や社会、職業とのつながりを実感することにより、科学技術や理科・数学に対する興味・関心の喚起、理数学習の有用性の認識、科学技術関係人材への進路意識の醸成を目的として、以下のように各企業と連携し、授業を実践した。

- ・ H21.11.10 (火) 第5, 6校時  
附属静岡中学校2年A組, C組
- ・ H22.11.17 (水) 第1~4校時  
附属静岡中学校1年A組~D組  
2年連続で、家庭科 単元「食生活と自立」において、日本製粉(株)と連携し「小麦粉を科学する」の授業名で授業を行った。
- ・ H21.12.17 (木) 第6校時  
附属静岡中学校2年B組, D組  
技術科「エネルギー変換に関する技術」単元において、(株)WINPROと連携し“ほんもの”の小型風力発電機を導入した授業を行った。
- ・ H22.1.25 (月) 第3~6校時  
連携: 静岡ガス(株)、三菱電機(株)、日本軽金属(株)、ヤマハ(株)
- ・ H22.12.16 (木) 同上時  
連携: 静岡ガス(株)、三菱電機(株)、丸長鍍金(株)、(株)カネボウ化粧品  
2年度連続で、静岡市立清水第七中学校2年理科 単元「化学変化と原子・分子」において、上記各4企業と連携しそれぞれの企業の特徴を生かした授業を行った。学年7クラスという大規模校での実践モデル構築を目指した。
- ・ H22.3.1 (月) 第1~4校時  
附属静岡中学校3年A組, B組(各2時間)  
中学校理科最後の授業に、京都大学の齋藤氏(助教)を講師に迎え衛星データを立体表示しながら、宇宙や宇宙から見た地球の様子についての授業を行った。(この実践の一部は下記IIと協働)
- ・ H22.3.12 (金) 第5校時

附属静岡中学校2年B組

理科 「化学変化とエネルギー」単元において、静岡ガス(株)と連携し「燃料電池とエネルギー環境」についての授業を行った。

(2) 平成21年~23年度文部科学省宇宙利用促進調整委託「地球立体表示装置と衛星データを用いた教育プログラムの開発」(京都大学理学研究科と情報学研究科、情報通信研究機構、国立科学博物館、静岡科学館、静岡大学の共同研究)において、具体的な授業プログラムを開発し、現在までに実践したのは以下の通りである。

- ・ H22.3.6 (土) 10時~15時
- ・ H22.12.18 (土) 10時~15時  
2年度続けて、小山町総合文化会館において、小学校1~6年を対象に小山町生涯学習フェスティバルの一環として科学教室をブース形式で行った(熊野善介、山崎財団と共催)。
- ・ H22.3.7 (日) 10時~14時  
静岡市科学館る・く・るにおいて35名の小学校5, 6年、中学1, 2年生を対象とした「理科大好きスクール」の一環として、開発した授業プログラムを実践した。
- ・ H22.8.11 (水)  
富士市立吉原第二中学校における科学教室での授業実践。
- ・ H22.8.21 (土)・22(日)  
アクトシティ浜松において「SBSかがく特捜隊 夏祭り」ブース展示。
- ・ H22.8.29 (日)  
静岡県吉田町立「ちいさな理科館」における科学教室で実践。

(3) 平成20年度~22年度文部科学省委託研究「原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ」の採択を受けた「HLW 地層処分地選定に関する日本型合意形成モデルの構築」(代表 静岡大学長)のうち、「教育プログラムの開発、実践」(代表: 熊野、分担: 丹沢、内ノ倉、萱野)を担当し以下の授業を共同実践した。

- ・ H21.2月 H22.2月  
2年連続で、掛川市立東中学校3年理科「科学技術と人間」単元において
- ・ H22.2月  
附属静岡中学校3年理科「科学技術と人間」単元において
- ・ H22.2月  
附属島田中学校3年理科「科学技術と人間」単元において
- ・ H22.6月~9月  
附属静岡中学校2, 3年生「選択情報」において12時間の教育実践

## 3) 社会科教育 (磯山恭子)

2009年度より、静岡大学教育学部社会科教育講座では、社会科教科懇談会を実施しはじめた。社会科教科懇談会では、社会科に関する教育と研究の質的向上を目指し、静岡大学教育学部各附属学校社会科教員と静岡大学教育学部社会科教育講座教員とで、社会科に関する情報交換を行っている。

社会科教科懇談会は、次の通りの手順で行っている。まず、社会科教育講座教員の中から、コーディネーターを選ぶ。次に、各附属学校社会科教員と社会科教育講座教員とで、社会科授業づくりに関連のある調査場所を見学する。さらに、コーディネーターが、社会科授業づくりを視野に入れながら、ミニ講義を行う。

第1回社会科教科懇談会は、2010年2月26日16時～20時30分に実施した。コーディネーターは、社会科教育講座の西野肇先生が担当した。調査場所は、静岡市にある「松岡カッター製作所」であった。参加者は、各附属学校社会科教員7名、社会科教育講座教員6名、教育学研究科大学院生2名の合計15名であった。

松岡カッター製作所における切削工具の製造過程の見学を踏まえて、西野肇先生は、今後の産業学習の方向性をテーマに講義を行った。これらのことから、参加者は、社会科授業づくりの可能性を、次の通り考察した。

「... (環境に配慮した) 企業を見学することで、『本物』を体験することができ、そこからの『気付き』がいくつもあるであろう。...他地域とのつながりから考える地域の産業としての扱いなど、また、その発展について、経済の様子とからめて考えていくのもよいのではないか。企業としての活動のあり方もとても重要であり、そこから道徳的な考えや、社会に通用する生き方も考えさせることができるのだろう。」

(各附属学校社会科教員)

「...生産、労働という現場を直に見るということは、生徒たち、学生たちにとって貴重な経験だと考えます。...社会科に向き合うに当たり、重要なことだと思っています。」(社会科教育講座教員)

「モノづくりや地元と産業、社会、人との関係を考えさせ、感じさせることができるよい体験の場となる可能性を感じました。」(社会科教育講座教員)

このように、実際に調査場所に一緒に赴き、共有した社会的事象をもとに、具体的に社会科に関する情報交換を行うことができた。

なお、第2回社会科教科懇談会は、2011年2月18日に実施することを計画している。コーディネーターは、静岡大学教育学部社会科教育講座の中條暁仁先生が担当する。調査場所は、浜松市にあるピアノ工場の予定である。

## 4) 美術教育 (芳賀正之)

教員養成大学・教育学部及び附属学校園は社会の変化や子どもの姿を捉えながら、教育内容や指導法を検討し、新たな教材開発を試み、地域の学校現場の実践を様々な方面から支えている。これまで静岡大学教育学部美術教育講座(以下、美術教育講座)では、美術教育実践の場を柱に教科専門と教科教育との連携をより緊密なものにし、大学の研究成果や各附属学校との共同研究の成果を地域の教育の活性化に繋げてきた。2004年より美術教育講座が意欲的に作成・発行し続けてきた研究誌『図工・美術授業研究 FILE』シリーズは、美術教育実践研究の交流及び情報発信の場を担い、多くの成果を得てきた。その六年の歩みを踏まえ、平成21年10月、美術教育講座と各附属学校の図工・美術教員が協力し、地域に向けて、美術教育研究発表会を実施した。静岡、島田、浜松、各地区における附属の合同研究会でもあるが、この美術教育研究発表会では、各附属学校の実践報告を踏まえながら、地域の美術教育の活性化について、その可能性を探った。

各附属学校の実践研究交流の場となる美術教育研究発表会では、テーマを「生涯に渡る美術の学びとは、美術教育の役割とは」と設定した。ここでは、附属小学校における実践発表、附属中学校における実践発表、公立中学校における実践発表、それに先立ち、大学院生や修了生の研究発表を取り入れ、様々な立場からの実践発表を行った。浜松、島田、静岡といった三つの地区における各附属学校の図工・美術教員がそろって、地域に向けて発表するという試みは、静岡大学教育学部においても画期的な出来事であった。また、公立学校の実践発表も加わったことで、附属と大学、そして地域との連携のあり方を示す結果ともなった。

また、22年度、地域や附属学校との連携において、美術教育講座では以下のようなことに取り組んだ。

- ・平成22年7月3日、「図工美術大好き会」において、大宮康男(教科専門・日本美術)が、「静岡県の仏像」と題し、地域の先生方を対象とし、日本美術における仏像の鑑賞方法について講演を行った。
- ・平成22年11月23日、静岡県立美術館にて、美術教育講座では地域の先生方と共同で研究会「美術教育実践発表及び造形を語り合う会」を開いた。地域の先生方や附属の先生、大学生も参加し、互いに実践発表を行い、様々な意見交換を行った。
- ・「美術教育実践発表及び造形を語り合う会」と併せて講演会を企画した。講演者には滋賀大学の新聞仲也氏を招き、鑑賞教育をテーマに講演され、参加者36名という会となった。
- ・定期的に地域の先生方と研究会を設け、今日、鑑賞教育に関心が高まっていることもあり、鑑賞教材の開発に取り組んだ。ゲームを行いながら美術

作品に親しむというアートゲームのひとつ、アートカードの作成について検討した。

- ・平成22年12月12日、静岡県立美術館で開催された「第2回鑑賞教育指導者研修会」に、登坂秀雄（教科専門・彫刻）、芳賀正之（美術科教育）、高橋智子（美術科教育）が参加した。芳賀と高橋は講演を「美術教育史にみる鑑賞～鑑賞教育の実践の可能性」と題し、講演を行った。また、それぞれが分科会の助言を務め、登坂が全体の協議を通して講評を行った。

今後は、『FILE』を軸にしたプロジェクトを推進していく中で、様々な美術教育研究会等に参加し、また共同で開催を試み、地域の教育の活性化に向けて、大学と附属学校、地域との連携による研究成果を示していきたい。

## 5) 技術教育（文責：江口啓）

（西ヶ谷浩史・江口啓・杉村竜也・紅林秀治）

### （1）これまでの研究の経緯

平成24年度から完全実施される新学習指導要領に向けて、教育学部技術教育講座と附属島田中学校との間で、平成20年度から共同で研究を行ってきた。具体的には、「持続可能な社会を構築する為の能力と態度の育成」という視点に立って生徒を育成するために、エネルギー生産を目的とした生物育成を主題に共同研究を行ってきた。

平成20年度においては、附属島田中学校の西ヶ谷教諭の協力の下に、附属島田中学校においてナタネを栽培し、ナタネからバイオディーゼル燃料を効果的に生産するための手法を大学側において研究した。また、附属島田中学校側においては、大学側から提供した実験データを基に、中学生を対象とした実践授業を行うことで、指導方法の研究を行って頂いた。

平成21年度においては、平成20年度の実践をもとに、「エネルギー変換の技術から持続可能な社会を考える授業」を主題として研究を行った。具体的には、附属島田中学校の技術科の授業において、胡麻を生徒に育てさせ、その胡麻からバイオディーゼルの生成し、模型のディーゼルエンジンを動かすという授業を行った。これらの共同研究の結果、生物を育成し、バイオマス燃料を生産するという授業が、中学生でも可能であることが実証できた。

### （2）平成22年度の取り組み

平成22年度には、「持続可能な社会を構築するために必要な能力の育成」を主題として、平成21の研究をさらに深化させた。具体的には、「持続可能な社会を構築するために必要な能力」を育成するための3年間のカリキュラムを、西ヶ谷教諭が中心となって作成した。本研究は、平成22年8月に岐阜大学で開催された日本産業技術教育学会第53回全国大会において、「持続可能な社会を考える技術科の授業」という研究題目で西ヶ谷教諭自らが口頭発表を行った。また、平成22年11月には、附属島田中学校において研究授業を行った。同研究授業においては、図1に示すように本物のディーゼルエンジンを2台用意し、軽油とバ

イオディーゼルで動かした。生徒には、2台のエンジンからの排気ガスを比較させることで、燃料を比べてバイオディーゼルが環境に良い点を化石燃料との比較から考えさせ、カーボンニュートラルの考え方に気づかせることを行った。この共同研究の結果、生徒は自らの体験をもとに、バイオマスエネルギーと社会への影響に関する意見を持つことができるようになった。



研究授業の風景

## 6) 家政教育（文責：澤渡千枝）

（吉原崇恵・川手隆・新井映子・小川裕子・澤渡千枝  
色川卓男・冬木春子・村上陽子・小清水貴子）

### （1）はじめに

家政教育講座では附属学校の家庭科教諭および附属教諭経験者との交流を長年続けて来た。授業研究会の旅費補助を得、2009年度は例年の交流会（2月）に加えて、40年間本学で家庭科教育に専念された吉原崇恵先生の2010年3月の定年退職にあたり、教師・学生向けの教科書編纂を行った。2010年度の交流会も2月に予定している。

### （2）教科書の刊行

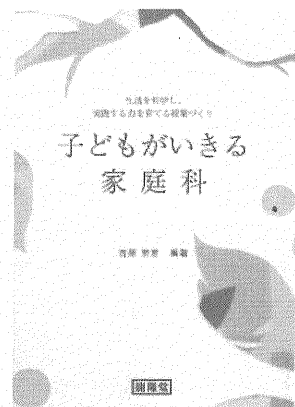
「子どもがいきる家庭科-生活を科学し、実践する力を育てる授業づくり-」吉原崇恵編著、執筆者総数54名、2010年4月30日、開隆堂より発刊した。本学では、2010年度より「専門基礎家庭」「家庭科内容指導論」等の講義テキストとしても活用している。内容は、3部構成で、「第I部：家庭科で育てる力と私の授業づくり」では、着実に挑戦的な内容を網羅した、小・中学校の家庭科の多様・多数の実践が報告されている。「第II部：生活の科学と家庭科の基礎」は、小・中学校の家庭科教育へのコネクションを持った大学の教科専門から指導要領の関連分野を読み解いたものであり、自分の専門分野に閉じこもることなく、各分野の経験をふまえた、現代および将来の家庭科へのアプローチのために貴重なものである。「第III部：家庭科教育 Q & A」では、家庭科の歴史や課題をあえて最後に Q & A としてとりあげ、今後の検討課題を提起している。全体を通して子どもの学びの発展や、成長を願う視点が光り、あたたかくかつ、透徹した家庭科への期待が満ちている。刊行後の5月15日には刊行記念交流会を開催した。

### （3）附属交流会の開催

2010年2月20日、13:00-16:30、B-nestにて開催。

内容は次の通りである。

- ①近況報告（附属校や地域校勤務の悩みや喜びなど）
- ②特別報告（PowerPointによる）
  - その1：ドイツの環境教育視察（2009. 11. 12～23）報告：加賀恵子先生（浜松中学校）
  - その2：生活力調査（共修世代）から家庭科カリキュラムへの示唆：吉原崇恵・小川裕子
- ③附属校-大学間の情報交換：公開研究会、教材研究に対する大学側協力の在り方について・・・相談、つなぐ、確かめる、広げる、価値づける、課題提示など
- ④附属校(地域校)間の情報交換：研究交流
- ⑤今後の交流時期について
  - (4) 2011年2月19日に開催予定の内容
  - ①学部、附属各教員の2010年度の研究活動など
  - ②附属教員の労働時間の問題（昨年からの経過報告）
  - ③附属学校における家庭科教員の実態（附属の家庭科教諭としての問題・課題・改善要望など）



## 7) 英語教育（矢野淳）

英語教育講座の矢野淳は、現在附属静岡中学校英語科の協力のもと、以下の研究を行っている。

小学校外国語活動が平成23年度より、領域として必修化される。移行期間である平成21・22年度、静岡県の小学校ではほぼ全県的に外国語活動を実施しているが、平成23年度以降の年間35時間を満たしている小学校は多数派ではなく、学校においてばらつきがある。使用教材は、主として文部科学省著作の「英語ノート」1・2である。

この「英語ノート」には、児童が興味・関心をもつ内容をもとに活動を行うべく、児童が表現したいであろう内容を優先することから、とすれば中学生にとっても難解な語彙がある。例えば、水族館（aquarium）や弁護士（lawyer）である。こうした単語の英語の訳語がわからず、英語で相手に伝えたい場合、辞書を引かずに2語以上の手持ちの単語でどのように伝えるかを、中学1年生に記述してもらった。この結果を、英語として意味が通じるかどうかを非日本人英語話者に判定してもらい、どこまでの表現が通

じるか、通じる表現の分析から、英語科教員は、英語で表現することに関して、何に留意して指導すべきかを探っている。さらに、この研究成果を小学校外国語活動に還元し、その円滑で効果的な必修化に貢献したい。

## 8) 特別支援教育（文責：大塚玲）

（大塚玲・香野毅・渡辺昭広・秋本公志・清水笛子）  
【平成21年度】

### （1）研究協議会の助言等

小学部・中学部・高等部・特別支援部のそれぞれに対し、研究の概要と授業研究についての検討、授業研究会への参加、授業参観、研究協議会での助言等を行った。小学部は香野、中学部は秋本、高等部は渡辺、特別支援部は大塚が担当した。

### （2）特別支援部関連

①附属特別支援学校特別支援部が主催する「静岡特別支援教育勉強会」において、特別支援教育に関する事例検討会、研修会、講演会を計6回行った。香野がファシリテーターとなり、すべての会について企画・運営を行った。

②特別支援部の出張相談（市内中学校）に同行し、授業参観、話し合いに参加する。また、夏休みに開催されたN小・中学校合同事例検討会に特別支援部の教員とともに参加し、講演及び事例への助言を行う。（大塚）

### （3）静岡大学公開セミナー

：「学ぶって楽しい！－大学で学ぼう－」

静岡大学生涯学習教育研究センター主催の静岡大学公開セミナー「学ぶって楽しい！－大学で学ぼう－」の企画と運営を渡辺が附属特別支援学校の教諭と連携して行った。（年2回開催）

### （4）学部授業関連

#### ①「障害児教育体験演習」（秋本）

教育実習Ⅰと関連した演習を設定した。附属特別支援学校に協力を依頼し、附属特別支援学校において児童生徒の実態把握し、学習指導案（略案）作成する。

#### ②「障害児心理学演習」（香野）

前期毎週月曜午前中を附属特別学校で授業を実施した。児童生徒の個別指導を行った。この実施については必要な協力を附属学校から得るとともに、適宜、附属教員と学生、授業担当教員の間で情報交換や指導等が行われた。

#### ③卒業研究

学部学生の卒業研究の実施に際し、附属学校在籍児童を対象とし、行動観察等の研究活動を行った。  
【平成22年度】

### （1）研究協議会の助言等

小学部・中学部・高等部のそれぞれに対し、研究の

概要と授業研究についての検討、授業研究会への参加、授業参観、研究協議会での助言等を行った。小学部は香野、中学部は清水・大塚、高等部は渡辺が担当した。

(2) 研究フォーラムへの協力

附属特別支援学校が開催した研究フォーラムにおいて、シンポジウムの企画に参画し、当日は司会の役割を担った(香野)。また、ラウンドテーブルの企画に参画し、当日は司会の役割を担った(渡辺・大塚)

(3) 特別支援部関連

附属特別支援学校特別支援部が主催する「静岡特別支援教育勉強会」において、特別支援教育に関する事例検討会、研修会、講演会を計5回行った。香野がファシリテーターとなり、すべての会について企画・運営を行った。

(4) 静岡大学公開セミナー「学ぶって楽しい!—大学で学ぼう—」

静岡大学生涯学習教育研究センター主催の静岡大学公開セミナー「学ぶって楽しい!—大学で学ぼう—」の企画と運営を渡辺が附属特別支援学校の教諭と連携して行った。(年2回開催)

(5) 学部授業関連

①「障害児教育体験演習」(清水)

教育実習Iと関連した演習を設定した。附属特別支援学校に協力を依頼し、附属特別支援学校において児童生徒の実態把握し、学習指導案(略案)作成する。

②「障害児アセスメント演習」(香野)

前期毎週月曜午前中を附属特別学校で授業を実施した。児童生徒の行動観察と心理検査を行った。この実施については必要な協力を附属学校から得るとともに、適宜、附属教員と学生、授業担当教員の間で情報交換や指導等が行われた。

③卒業研究

学部学生の卒業研究の実施に際し、附属学校在籍児童を対象とし、調査・実験等の研究活動を行った。

(6) 大学院授業関連

①教育学研究科教育実践高度化専攻

教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)1年次生の訪問型実習(授業参観と学校説明)を行う。(渡辺)

②「特別支援教育における授業づくり」

研究協議会における中心授業を講義の中で扱う。授業についての概要説明(研究協議会の準備の中でものと兼ねる)と事前の授業参観を踏まえ、当日の授業を参観した。(清水)

③「特別支援教育における自立活動の理論と実際」

知的障害における自立活動の実際について、附属特別支援学校の授業見学及び学校での取組について聞く。(清水)

(7) 学生ボランティア関係

特別支援学校でのボランティアをしたいという希望者(特別支援教育専攻学生等)について、附属特別支援学校で学生ボランティアとして受け入れてもらった。(清水)

9) 国語教育(文責:大塚浩)

「国語教育の会」は、1995年に設立、静岡大学教育学部国語教育講座教員、附属静岡小学校、附属浜松小学校、附属静岡中学校、附属島田中学校、附属浜松中学校所属の国語担当教員によって組織されている研究会である。

2010年2月6日に開催された「第13回大学・附属学校国語教育の会」では、次のような研究内容が討議された。

1. 国語科において言葉や文の働きの効果を見直すことで、意図をもった言語表現を実現するための研究
2. 人間形成のための国語科の学力
3. 音声コミュニケーション能力を高める授業づくり
4. 学びひたる国語科の授業の創造
5. 中学校における話し合い学習
6. 国語科新学習指導要領について

4. 今後の課題と展望

「授業研究会」を立ち上げおよそ2年が経過し、各教科・学校種において、軽重の違いや範囲の程度の違いはあるものの、着実に連携実績が重ねられつつある。そのために研究会が果たしてきた役割には大きいものがあると評価しているが、今後いっそうの発展を遂げるためには、以下のような課題が残されている。

・活動のための運営資金を今後どう獲得するか

国立大学への運営費交付金削減が続く中、安定的な活動を継続していくためには、科研費をはじめとする外部資金の獲得などを今後考えていかなければならない。

・研究会活動の充実

前述のように、本年度までは、研究会において教育の現状を「学習」し「情報の共有」を図ることを行ってきた。今後は、附属学校や公私立の学校、地域の教育委員会等との連携のため、質の高い活動が組めるよう議論する場が必要である。企画・立案だけでなく、評価も視野に入れて、今後議論を重ねていく必要がある。

・研究会参加者の拡大

現在は、教科教育ならびに教育学を専門とする教員が中心に研究会を運営しているが、これを教科専門の教員にも呼びかけ、連携活動の量的拡大を図る必要がある。



・附属との連携にとどまらない活動の展開

これまで、主に附属との連携活動を中心に展開してきたが、数学教育や理科教育の一部の活動に見られるように、一般公立校や教育委員会等との連携にまで広げていく必要がある。

「授業研究会」も3年目を迎えるにあたり、これらの課題をできるところから着実に克服することによって、他大学に例を見ない実績の蓄積が可能となろう。

**引用・参考文献**

- 文部科学省（2001）今後の国立の教員養成系大学学部  
の在り方について（在り方懇報告）  
文部科学省（2009）教員養成課程の質的な向上に関する  
協力者会議第3回会合配付資料1-2